

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の 関係についての考察

高野和子

現代日本の服飾を文化的・科学的に総合考察する上において、古代の服飾及びその当時の日本の歴史的・社会的背景を観せずしては不可能なことである。

現代の日本服飾は、明治維新以後、西洋文化直輸入の流水の中に立ち、現代の日本文化は、西洋文化と日本伝統的文化を歴史の中で消化した姿である。日本国（大和国）誕生以来、平安時代に到るまでアジア大陸との交流はめざましかつたことは諸書の記するところである。今、歴史的年代記述をしようとは思わない。その古代のアジアと日本の服飾の上における関係を考察するのである。

元来、服飾はその時代社会の内部・生活の中から生まれ、生活と歩みを共にするものであるから、民族文化に影響をおよぼすものと考えるのである。またそれだけにとどまらず、他国または他民族の文化・服飾を学びとつたり、逆に他民族または他国の文化・服飾に影響を与えていたりして世界史的・国際的文化の伝播・交流の中で文化は発達し、また服飾もそれにつれ変遷していくものと考へるのである。

その服飾が伝播・交流により生きた効果を生ずるためににはそれだけの歴史的条件が背景としているなければならない。水が高い所から低い所へ流れるが如き物理的感覚で社会の主体性を無視して服飾の移動を考察することは間違いである。服飾、特に古代日本の服飾構成をみると、他の文化との交渉が服飾文化の変遷の重要な条件である。このことは文化上の鎖国が服飾においてどういう結果になるかを考察するだけでも明らかであろう。

古代飛鳥・奈良時代において、日本は民族文化発展・目的のため隣国、隋・唐との交渉をもつた。それによる宗教・文化の伝来は、日本服

飾文化にも大きな刺激を与えた。しかしそれは、唐との交渉だけに留まらず、その美術、工芸等の文化財によりペルシヤ等の西アジアの文化的影響を受けていたことはいうべくもない。

それでは服飾の上で、原始時代からの歴史の流れの中で、その服飾文化をいかに日本人が日本人の血と心の中に学びとり、生活の中にいれていったか、西アジア・隋・唐・飛鳥・奈良朝の関係・服飾文化において考察する。

### 日本古代史概説

紀元前5・6000年頃、日本民族が日本に住み始めたのは、ユーラシア大陸北方からか、或は南方の島々から来たといわれる。この北方或は南方の民族が移住して各地に集団生活を営み、その間民族同志が混血融和して、日本民族が形成されたのである。そして5・6000年の間に新石器時代から青銅器・鉄器に移つて行き、考古学でいう縄文式文化・弥生式文化を形成するのである。この時代に原始社会が成立したのである。

紀元前3世紀以前の縄文式文化は、人間の生活に直結していた。そのため生活必需品として器が必要であり、そのなかで狩猟・漁撈・植物採集を主として、平地式住居生活がなされていった。そんな素朴な生活は一定の土地に住居を構え、農耕生活を営み、金属文化の登場する弥生式文化に変つていくのである。

農耕を土台とする生活態勢は、人類の中に経済・社会・富の觀念をつくり出し、階級と国家組織を成立させる種を蒔いていたのである。農耕に芽ばえた経済の成長は、階級差別・部落単位の国家の発生による政治運動の活発化をなし、ついに大和朝廷が力をぎつた。これが紀元前3・4世紀頃で古代社会の第一歩を踏み出したのである。

この支配者達の強大な権力を象徴するものとして、大和朝の一族や、国造達が礎いた墓が「古墳」であり、この時代を古墳時代とも呼んでいる。我々が当時の文化を忍ぶ埴輪が作られたのも、この時代である。また、埴輪は、この当時の服飾文化を知り得る唯一のものでもある。

時代は飛鳥・奈良時代に移行していく。仏教文化を発展させた6世紀中頃、538年(一説)から大化の改新の645年に至る約2世紀間の飛鳥文化は、朝鮮半島を経て中国の六朝文化を取り入れ、後に隋の文化の影響を受けて発達したもので、外来文化は政治・文化・宗教面の土台となつたのである。

聖徳太子(573~621)は、隋との国交を開き、大陸文化を輸入した。しかしこれも国の上層部だけのものであつた。故に服飾文化・政治等にこの傾向が見られたのである。

その後強力な中央集権国家の成立を必要とし、中大兄皇子・中臣鎌足らにより大化改新(645)がなされ、律令政治がなされていった。この時代が、奈良時代である。律令による国内の諸制度は整備、拡大され、国家文化が栄え、学問・芸術もさかんに行なわれていったのである。

この時代の文化は、大陸・唐文化の色彩が濃厚である。8世紀頃の唐は、インド・ヨーロッパとも領土を接する一大国家であつたわけである。だから、直接には唐文化の影響を受けているが、間接にはインド・ペルシア・ギリシア・エジプト等の文化の世界性・国際性は、建築・絵画・工芸・服飾の面でもこの文化の特質を良く表わしている。この時代は、都が京都に移る794年・8世紀後半まで続いたのである。

#### 日本古代服飾

「男子ハ皆露紗ニシテ、木綿ヲ以テ頭ヲ拓グ。其ノ衣ハ横幅ナリ、但シ結束相連ネ、略シテ縫ウコトナシ。婦人ハ被髪シテ鬚ヲ屈シ、衣ヲ作ル単被ノ如ク、其ノ中央ヲ穿チ、頭ヲ貫イテ之ヲ衣ル。」と、歴史書「魏志倭人伝」の中に記さ

れるごとく、日本原始時代においては、男子は髪を結い、木綿の裂地で頭を縛り、服装は長い布を横幅に使って身体を被い、所々結んで縫つてはいない。女子は頭髪をなでつけて鬚を結い、衣服は長方形の布の中央に穴をあけそこから頭を出すように着ていたのである。(図1)

日本古代服飾図



図1 日本原始時代服装  
「魏志倭人伝」による想像図

縄文式時代には、夏期はほとんど裸体、冬期は獸の皮や布を簡単に付けていたのである。弥生式時代に入り、倭人伝にあるように男子は袴蓑衣型のものを、女子は貫頭衣風のものを着用していたことがわかる。古墳時代に入ると、人々が狩猟・漁撈・植物採集によつて生活していた時代は、農耕生活時代から富の大小による階級の発生、部落単位による国家政治活動の活発化、大和朝廷の建国という歴史の中に入つてゐたのである。

衣服の材料としては、麻・藤・楮などの繊維から作った布や綢等も用いられていた。男子は戦いと農業の中で衣袴(キヌバカマ)(図2)の姿をしていた。上半身を被う筒袖シャツ状の衣(キス)上衣と、袴という下半身着の二部からなつている。襟には垂領(タリクビ)式と盤領(アゲクビ)式の二つがあり、前者は胸前左右の襟をY字型に打合わせたもので、後者は丸首のものである。歴史的に見ると、垂領の方が盤領より先に出、左前が普通であつた。両者とも胸前を1、2ヶ所、諸縫(モロワ)に結び、

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の関係についての考察

帶をたらしている、衣の袖は手結（タユイ）手縕（タユキ）といわれる紐で肘のあたりを縛っていた。女子の場合は、埴輪などの女子像を見ると、上衣は男子と同様に衣をつけ、下半身はスカート状の裳（モ）を付けている衣・裳の形式である。裳の丈は膝頭位の短いものから足首が隠れるものがあり、襞あるものもあつた。衣・褲は、その時代において上層階級においては大陸との交通により変遷していくが、平安・鎌倉時代を通じて農民服の基本形式となつて行くのであり、現代のものまでその流れの端にあることを理解できるのである。その他のものに「股フサギノ略ナルベシ」と日本書紀にあるごとく、その型が牛の鼻の形に似ているもので、褲の丈のいつそう短かい今のパンツ状のもので、犢鼻褲（タフサギ）がある。装飾品としては細長い布で領巾（ヒレ）・淤須比（オスヒ）がある。領巾は両肩から掛けたもので、淤須比は頭上あるいは肩から掛けた全身まとつたもので、褲は下半身につけたズボン状のもので、活動を便利にするため足結（あしゆい）といううるので膝頭のあたりを紐でとめたものである。

歴史は移り、飛鳥時代に入る。聖徳太子の行なつた「冠位十二階制」の新政によつて、冠の位色により身分を定めたもので、徳冠・礼冠・信冠・義冠・智冠を更に大小によつて十二段階に別け、紫・青・赤・白・黒に色をつけ、中

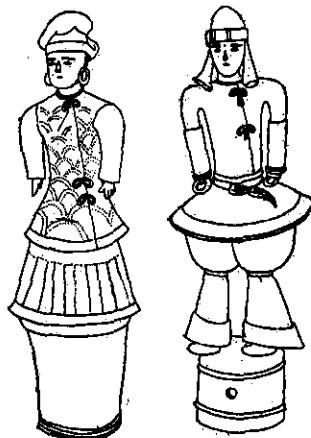


図2 女子埴輪の衣裳姿（伊勢崎市）出土  
男子埴輪の衣褲姿（埼玉県児玉郡美里村）出土



図3 飛鳥時代、袍に褶をつけた人物  
(天寿国曼茶羅による)

國・隋の制度「五行説」にならつて配色した衣服が出てくる。この配色制度は奈良時代になつて更に複雑になるのであるが、この時代を知る重要な遺品に、中宮寺にある聖徳太子の青春の生活を忍んだ刺繡作品「天寿国曼茶羅」がある。これは刺繡技術の発達、染色工芸の発達を示し、これにより衣服の形式は基本的には上下二部形式を踏襲しているのである。（図3）

前代の衣は広くゆるやかになり、褲はより狭くなり、裳には大陸的な装飾が付け加えられていった。褶（ヒラミ）、襷（マエモ）、脛裳（スネモ）等の装飾的表衣が衣褲様式に加えられていった。褶は衣の下、褲の上につける丈のやや短いアンドン袴式のもの、襷は褶の上につける前掛状のもの、脛裳は褲の膝下につけるゲートル状のものをいう。

奈良時代に入ると更に冠位制は、一時、十三階・十九階と複雑になるが、天武天皇によつて廃止され、「爵位六十階」が制定された。これは衣服の位を色により表示するものであつた。位服の色の改正は、その後何度も行なわれたのであるが、大宝律令により服飾における制度が明文化されて示されたのである。その後、養老律令により我々の手に明らかになつたのである。それによると、男女の別があり、文官、武官に区別されており、その両面とも礼服（ライフク）、朝服（チヨウフク）、制服の三種の衣服がある。これを整理してみると、

礼服…文官・武官・女官——大礼服

朝服…文官・武官・女官——官吏が公務に携わる平常服

制服…男・女子の無位官及び一般庶民の公事

服  
の互きである。<sup>(3)</sup>



図4 奈良時代の文官礼服

文官の礼服の着装型式（図4）は、冠（カンムリ）・衣（キヌ）・袴（ハカマ）・褶・条帶（クミオビ）、襪（シトウズ）・舄（クツ）を着用し、笏（シヤク）・綬（ジユ）・玉佩（ギヨツパイ）等の付属品を付けたものである。各々を説明するならば、冠（礼冠・ライカン）は金属、宝石類を鏤めた莊厳なものである。衣は身体の大部分を被い、大袖と小袖をまとい小袖は大袖の下に着るもので、大袖は袖口が広く、袖付けの狭いもので位色があり、襟は垂領式である。小袖は下着であり、盤領式の襟をもつてゐる。袴は先が二つに分かれ、白い袴を下半身に付け、その上に深い襞をとつた腰巻状の褶をつける。条帶は五色の糸を編んだもので、やや腰高に締め、その上に同じく五色で編んだ珞瓔（ラクヨウ）風の玉佩を提た。舄は俗に鼻高沓という先端が高くもりあがつたものであり、歩くと玉佩のその爪先に当つて音をたてる。襪は紐の付いた足袋状のものである。以上は唐文化の色彩が強く、大陸的である。

武官の礼服もやはり中国的な要素を持つつているものである。冠、位襷（イオウ）・襷檔（ウ

チカケ）・袴、腰帶（コシオビ）・行縢（ムカハギ）・靴（クツ）・笏・横刀（イカケ）でとめた。黒の羅で出来た冠を付け、位色を持つ上衣である位襷を着用したのである。腋下は刀を刺すために縫つていない。これは闕腋の袍（ケツテキ・ホウ）といわれるもので、襷檔はその上にかけるものである。これは赤地の錦の中央に首を通して二つ折りにしたものである。この上からバンド風の帯を締め、先の二つに分かれた白の袴を下半身につけ、向脛（ムコウズネ）を被う錦の行縢をつけ、袴の裾が入る皮製の中長靴風の深靴を履き、大刀を左腰に吊つたのである。

色彩・形態とも華美なものに対し、優美な女子の礼服は、奈良の薬師寺にある吉祥天像は神像であり理想化され虚飾が多いが当時の礼服の大要を伝えている。宝髻は結髪の髪の所に金玉製の珠数（ジュズ）状のもので飾つたもの衣は広袖、垂領式の上半身式、袴と褶は襞のあるスカート状のもので、後より前へ褶をまとい、更に前より後へ袴を重ねて巻いて着、縦帶は縁をつけた色帶で、前方正面で蝶結びにして長く下げるもので、男子の結び帯にあたるものである。足には襪と帛（キヌ）製の舄をはいた。

文官の朝服は、朝廷への出仕服である。構成は頭巾（キトン）・衣・袴・腰帶・襪・履（クツ）・笏である。頭巾は絹製袋状のもので、下の方に紐がついている。衣は盤領式で筒袖の袍で、膝下15~18cmぐらいのもので、袴は礼服の場合と同様である。履は黒皮製で短靴である。礼服と比らべれば非常に簡素である。武官の朝服は頭巾・位襷・腰帶・袴・横刀・襪・履などが構成要素である。女子の朝服（図5）は衣袴とで女子礼服より一層簡単になる。

一般庶民にも着用することのできた制服は、男子制服は形式・構成はほとんど朝服と同じであるが、灰色と位色がきめられている。女子の制服もほとんど同じであるが、袴は緑・縲（ハナダ）・紺のうち一色のくくり染か、紅かに決められていた。その他のものとして袖丈の短い

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の関係についての考察

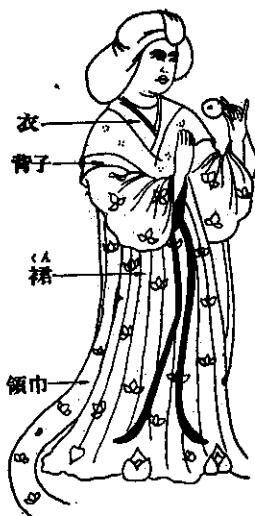


図5 女官の朝服（鳥毛立女屏風による）

下着・半臂（ハンピ）・衿の短衣の襖子（オウシ）・單衣の汗衫（カンサン）・古来からの領巾、背子（ハイシ）等を着用したのである。以上、はつきりとした服飾様式があり、これを着用していたのは上流階級の人である。一般庶民は前時代の活動的な、そして実用的なものが使われた。男子は筒袖の短衣に袴、女子は筒袖のやや袖巾の広い上衣を着用していたと想像されるのである。故に、この時代までは庶民にはほとんど服飾の歴史は無く、服飾の歴史は上流階級のものだけであつた。

衣料としては、麻・楮で作つた白衣、女子の襖（スリ）衣という植物の花や実で色をつけたものも使われた。錦は今まで絹錦であつたのが、緯糸で文様を織り出すものができた。唐草文様、鳥獸文様、花鳥文様などの図柄が出てくる。綾・羅・氈（セン）の織りかたが、錦の他に工夫されてきた。これらは現在の技術と同等の高さにあるのである。染色法は、絞り染、蠟染<sup>(4)</sup>・板じめ染等、染色工芸もさかんであつた。

## 西アジアの古代史概説

古代西アジア文化は、遊牧民・セム人がエウフラテス及びティグリス両河のメソポタミア地方の草原地帯に古くより住みつき、異色ある文

化を発展させた。ここに曙は、エジプト以前であろうと推定されるが、服飾史上特に目立つ一頁を残したとはいえない。

西アジアの北東部は、小アジア(Asia-Minor)・アルメニア (Armenia)・イラン (Iran) の山岳・高原地帯であり、南部は、アラビア (Arabia) 半島を中心に、東北アフリカに続く乾燥・不毛の大砂漠・草原地帯に覆われている。ただこの間に挟まれたティグリス・エウフラテス両流域のメソポタミア (Mesopotamia) から、地中海沿岸のシリア (Syria)・パレスチナ (Palestina) にかけて細長く発達した半月形の河耕地帯は、「肥沃な半月形 (Fertile Crescent)」と呼ばれ、その一端はさらに、砂漠の中の河谷に沿つてスエズ地峡で、ナイル河口の肥沃な三角洲 (Delta) に接し、800km上流のアッスワン附近に達している。このペルシヤ湾 (Persian Gulf) からエジプト南部に至る延長約3000kmの帶状の綠世界が、古代オリエント文明の発達の主要な地盤となつたのである。しかし、絶え間ない民族の移動や興亡、度々の内乱に伴なう国々の盛衰は、民族特有の伝統ある確実な文化を育てなかつたのである。

小アジアには古くから住んでいたアジア系の人種、メソポタミアの南部にはミユメロール人・セム人がメソポタミア地方に落着いた以前にいた。アーリア人の大群が、中央アジアから南トルキスタン或いはインド地方にかけての草原を幾度か移動を繰返していた。これらの民族の分枝は、時の経過と共に相錯綜し、雑然とした状態を出現することとなるのである。

動搖に満ちた歴史は、他民族との接触・融合によつて服飾文化を刺激し、発展させる素因とはなろうが、祖先や故郷をそれぞれ異なる人間の集合は互に民族の抑圧が激しく、民族的特質を自滅させてしまつたのである。だから絶え間ない民族交流は、その同化の上に民族様式を確立・発展させる時間を与えなかつたのではないかと考える。しかし、この特殊な環境を背景として生まれる多種多様な衣服形態を見逃すことはできない。南方型服飾様式・北方型服飾様

式の並立と融合・単純服飾様式等、あらゆる様式が乱出しているのである。

ここにペルシア帝国が樹立するまでの西アジア史の概説を述べ、その各時代の服飾様式を述べることにより、ペルシヤ以前の西アジアの服飾形式を考察する。ペルシヤ樹立までの歴史・概説を述べるならば、紀元前2100年、エウフラテス河の上流にあるバビロンを都としてバビロニア王朝が興り、ハムラビ王（前2003～1961）を頂点として栄えたが、間もなく他からの侵略に会つて衰微し、アッシャリヤによつて亡ぼされた。これが紀元前8世紀後半である。勢力を保ちアッシャリヤ一帯を統一したアッシャリヤは、他民族の侵入や内乱が絶え間なく、メディアとバビロニアの連合軍に会つて紀元前609年に滅亡した。その後新バビロニアが樹立され、メソポタミア地方を支配したが、わずか70年にしてペルシア帝国に併合された。この中心的な歴史をその背景として生まれた服飾は、自然条件との関係をみながら考察する。

#### 西アジア古代の服飾

バビロニア人の前身であるシユメール人は、有史以前からメソポタミア南部に住み文化を築いた。その後、バビロニア人の進出によつて、シユメール文化はバビロニアに継がれた。

温暖な地に住んでいたシユメール人は、下半身を被う南方型の衣服を付けていた。元来それは毛皮であつた。その後、織物の発明によつて、毛皮は毛織物に変づついた。短い腰布からスカート式のものまで、房の結び方や長さなどによつて変化をつけていた。房の端飾りやそれに類似した装飾が一様に付いているが、毛皮から織物への移行の足どりを示しているのである。

カケナウス（図6）のように初期においては下半身の衣服が主体であつたが、バビロニア時代に移行する頃から卷衣が出現してくる。これは織物の発達により、促されたものと見てもよいであろう。卷衣は、単独、或はスカートとして、テュニックと組合わされて着用され、様式が大きく変化してきた。そこでカケナウスも巻

き衣形式に変つてきた。（図8）

現代でもそうである様に、多飾は富の象徴であつた。故に、房の多いもの程、高貴なものとされていた。衣服の表面に幾段にも房が垂れさがつたカケナウス（Kaunakes）はそれまで毛皮をそのまま着用していたが、織物が発明されてから毛皮に似せて緯糸を経糸にループ状に結びつけることに変えられていつた。そして毛皮の様な織物が出来たのである。

人々の装飾欲や美感が高度になるにつれて、房以上のものが現われ色糸の織込みや刺繡などが考察されて、上流社会に普及されていつた。女子も主として巻き衣を用いていた（図7）。それは、バビロニア初期の頃から衣服を生活に必

西アジア古代服飾図

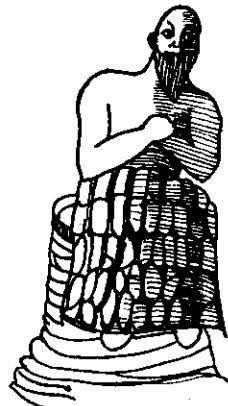


図6 カケナウスをつけるエピール像、メソポタミア初期王朝時代



図7 王妃ナビラース立像、バビロニア初期

要なものとして着用するのではなく、着用することによる美化が進んでいつた。装飾品は、バビロニアはエジプト人と接触があつたはずであり、巧みな加工による美しい金属を用いていたのであるが、エジプトの巾広い衿飾りが、彼等の洋服に不調和であることを知り、宝石が一列になつたネックレスを用いていたこと

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の関係についての考察

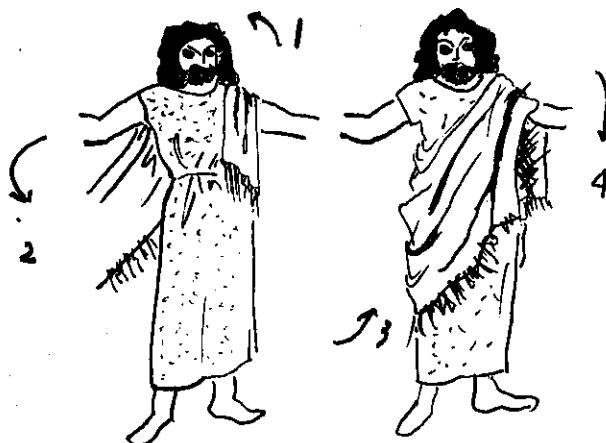


図8 ドレーバリーの巻き方, バビロニア男子服装

は、当時の人々が衿の詰つた形式には、エジプトの物が合わない事を知つていたのである。イヤリング・ブレスレット・チョーカー式首環をしていた。頭髪は美しいウェーブを持つていたので、被り物はあまりせず、縁を折り曲げた皮製のものがある程度である。履物は皮製のサンダルが用いられていた。

アッシリヤ時代に入ると、残忍性に富み、殺伐な民族アッシリア人は、バビロニアの文化に由来しながら、エジプトの影響を多分に受けて独自の分化を確立していった。バビロニア時代の房飾りや刺繡は、繊細な感覚と、精巧な技術によつて超人的なものになつた。織物技術は更に発達し、色調や技術の上で更にすばらしいものとなつた。バビロニア時代の服飾の生命とする房飾りは、アッシリア服に入つて繊細で優美なものとなり、結び方や長さなどに可能なかぎりの工夫がなされた。しかし、この時代を最後として、これは衣服から消えていつてしまうのである。

刺繡の模様はよく観察すると、エジプトと共にモティーフ、例えば蓮・翼のある太陽・山岡等を見る事ができる。房飾りや刺繡に技巧をこらした毛織物の他に、エジプトから麻、インドから木綿、シルクロードを通して中国から絹が輸入され、織物は発達していった。

衣服の形は、バビロニア時代の巻衣形式がそのまま継承されたもので、(図8, 9) 刺繡や房飾

りを中心としただけのもので、ドレープのものはほとんど見られないである。寒い地方に住んでいた彼等は、袖付けのピツタリしたテュニックと併用されていた。丈の長い、あるいは短いテュニック(ワンピース形式)が一枚の服で、その上に巻衣を自由な型式で巻きつけ、房飾りを効果的に示めていたのである。女子の場合は、金・銀・その他の金属・宝石類による華麗なもの装飾品や首環が好まれた。しかしこれも、女子の場合は遺例がなく、男子と同じ衣服の形式で着用したのではないかと思われる。



図9 アッシリア人の服装, C830年頃浮彫参考

その後、西アジアの大部分がペルシャ人に征服された時、織物技術は多年の伝統によつて色調や生産技術の最後の段階に入つていた。それはペルシャの着色・釉瓦による壁面装飾等により我々の知るところである。紫は高貴なものとして使われ、黄系統等、色調は豊である。模様はエジプト的なもの、アッシリア的なもの、宗教心の表われである天体によるものなどがある。

ペルシャ帝国が西アジアから広く統治するようになると、服飾の上においてもあらゆる様式が包含された。袖付けテュニックとズボン式のペルシャ服と、長く寛やかなローブ式のメディア服の二つの形式がある(図10)。長ズボンとピツタリした肘丈のテュニックの組み合せは寒

地での生活の中から生まれたもので、メディア服よりはるかに経験と技術に富んだ服である。ズボンがペルシャ人、すなわちアーリア人によつて導入されたことは、服飾の書であるなら定説として記されているところである。

寒い高原地帯からの移動により、彼等北方系の衣服を伝えて来たということには間違いない。ズボンが暖かいと気付いたのは織物発明以前のこと、最初は毛皮をつぎあわせていたであろう。それが西アジアに住み、織物の発明・発達により布製に代わり、暖かさとともに機能的であるという特徴をもつて普及した。そしてこれは戦争好きな兵士によつて着用されたことも明らかである。ズボンの形も布ができるべ型になつたというようなことは不可能であり、最初は布を巻くか布を被せ、皮による紐状のもので縛られていたことはいうまでもない。また、貴族が時折りピツタリしたズボンをはいて、その上からカンディスという不活発な長いロープを着て威厳を示そうとしたことも、働く階級の間に普及されたことを物語るものでなかろうか。ズボンはその後の普及の仕方を見ると男子の間に採用され、女子はズボンを下着として着用してゆるやかなロープをまとつている。



図10 ペルシア人の服装  
a グレイオス宮殿浮彫カンディン着用  
b ペルシアの女装（西洋服飾史、記載 Beaulieu による）  
c クセルクセスのアグターナ墓地浮彫より  
BC 5C

これは女子が淑やかに、社会の先頭に立つている男子に従属している社会制度の表われと見るべきである。ズボンは下層階級から上層階級に及びそれぞれの生活に応じて幅・長さ・装飾等が加えられてくるのである。

カンディス (Kandys) は、エジプトのカラシリスのようなロープで肢体を被うものである。このロープは貫頭衣の着やすさと、巻衣の美しさを兼ねそなえるもので、優美と変化を好む貴族の間で公服として着用されるに至つた。薄地布を一本の紐によつて厚地ラシヤには出し得ない優美なドレープを生み、整え方を吟味しながら襞を基礎的に整える美しさを出していつたのである。しかし、ペルシア人の求めるものはドレープの美しさではなく、織物そのものの美しさを求めたのである。

履物は足首までのものが多く、帽子はトーグ帽などのフェルト製の帽子を愛用した。

女子の例はきわめて少ない。Beaulieu 氏のをそのまま記載するならば、ゆつたりしたロープを着て、そのゆるみを細紐によつて前面みごとに表わしている。この紐は真珠で飾られているような皮で織つたものである。

時代が変るにつれ優美な服装は縫製技術の発達とともになつてロープの美しさから、カンディスの美しさに、さらにより単純に、活動的に、より美を求めていつたのである。しかし、平民においては紀元後になつても、まして現代になつてしまえ、巻衣・貫頭衣形式のもとのままである。

#### 西アジア古代服飾と日本古代服飾の関係についての考察

以上日本古代服飾と西アジア古代服飾を記したが、それはどんな点において関係があつたか考察してみる。

古代東西交通路は、東はモンゴリア (Mongolia) から南シベリア (Siberia) ・中央アジア (Central Asia) の北半部を経て、西カスピ海・黒海の北岸地方に及ぶ北方アジアの草原・砂漠地帯は、いわばユーラシア (Eurasia) 大陸

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の関係についての考察

を通じる自然の交通路として太古・旧石器時代から東西の交通に役立つていたらしいことは、南シベリヤ・北満・河北・オルドス (Ordos) の旧石器時代の遺跡からオーリニアシアン (Aurignacian) 期やマグダレニアン (Magdalenian) 期の遺物の発見からも解るのである。また北方アジアの草原・砂漠地帯ばかりでなく、オリエント (Orient) 地区を越えてアフリカの北岸地方に至るまで単一の文化圏をなしていることも見逃すことができないのである。これは生活環境の類似と移動性のある原始遊牧民族の間では交通は自由であり、それに伴なう文化の伝播も容易であることはうなづけるのである。また古代において、アジアと中国の交通が歴史時代の「絹街道」を通つてなされていたことはタリム (Tarim) 盆地やアム・シル (Amuderia Syrdaria) の両河の流域地方を通してもなされており、これは彩陶の伝播によつても示されて<sup>(8)</sup>いる。

タリム盆地を媒介として西アジア地方と何らかの交渉を持ち、その文化的影響を受けていた中国は、古代ペルシア (Persia) 帝国の発展やアレクサンドロス (Alexandros) 大王の東征がアム・シル両河の流域地方から西北インドに及び、中国戦国時代の思想に影響したのである。この時、西方の文化が中国に入つて来たものとしては何か、織物・家具・日用品・楽器等である。中央アジアの葡萄・西アジアの獅子・孔雀・駝鳥・安石榴などの動植物・これらは工芸品の装飾意匠などに用いられた。また、ローマから中国へ輸入されたものに、珊瑚・宝石・ガラス器等がある。

海上の交通においてはどうであろうか、中国東南アジア・インドとの間は海路を通じてなされていたであろう。春秋戦国時代に象牙・犀角・真珠などが、揚子江流域の地方から黄河流域に送られてきたことも事実である。

上記の事実から、中国は西・東南アジア・ユーラシアとの交通・文化の交流が太古時代からあつたのである。これはあらゆる歴史書等によつて記されていることであり、ここには概説を

述べた。

のことから日本は遣隋使・遣唐使等の派遣により、中国との文化・政治の交流があつたことは事実であるが、そのことは中国太古において、中国がペルシア・ローマ・西アジア・インドの交流により文化の伝播がなされていたわけであるから、日本奈良朝の服飾が中国の政治・文化体制に大きな影響を受けていることは更に広く考察すれば、その影響は直接ではなくてもユーラシア大陸・インド・西アジア・ペルシアの文化の影響があつたことはいうまでもない。この交流の事実にもとづいて服飾文化交流点を考察しなければならない。

アジアにおいても、中国・日本においても服飾の変遷があつたのは上流階級のものであつたことを注目すべきであろう。

奴隸、下層階級では、莫大な労働力の提供による貧困な生活は、服装における装飾などといふことは考えられないことであつた。故に、自然環境に対する安全性のためという衣服本来の目的のために着用していたその姿をそのまま紀元後まで続けており、特に目立つ変化といふのはなかつた。故に、貫頭着・巻衣・ズボンといふのがその姿であつた。

一方、貴族・上流階級においては多大な労働力によって富を得、その富によつて伝統的文化と外来文化の中で服飾は変遷したのである。ペルシャにおいても、中国においても亡興の中にあつて、勝つたものには富を、敗れたものには労働をという社会において、なおその度合いは強かつたのである。この共通の社会の中に発展した服飾様式を比較すると、

I) 日本において、原始・古墳時代においては筒袖があつたことは埴輪によつても理解出来る。それは飛鳥までつづき、奈良朝時代において、隋・唐の服飾文化における大袖がとりいれられたのである。中国においては、原始の服はみな筒袖式小袖である。それが蘇思勗墓壁画等によつて描かれてあるように、戦国後期・隋・唐に入つて大袖がほとんどのものとなつたのである。西アジア方面においても初期には筒袖テ

ユニツク式服飾型式であつた。ペルシア紀元前二世紀頃においては、カンディヌのようなローブ式のものが上流階級にとりいれられていたことがペルセポリス・アパダーナ基壇によつても知れるところである。これは日本の型式でいえば大袖型式にあたる優雅で変化にとんだものである。

この一つの流れにおいて、中国において大袖型式が出てきたのは、戦国・漢時代の頃である。ペルシアにおいては紀元前2世紀頃からである。日本においては6・7世紀である。この時代関係において、中国がペルシア等とシルクロードを通じて文化の交流を行なつたことは前述したが、日本と中国においても遣隋使・遣唐使によつて服飾文化の輸入があつた。この事実から日本奈良朝時代の服飾は、遠くペルシアの文化に芽を持つているといふことがいえると考える。現在、日本にあるペルシア・サーサン王朝時代のものであるといわれる「円形切子装飾瑠璃碗」が正倉院にあることにおいても、ペルシア人による服飾文化の伝播があつたとも考えられるであろう。しかし、その時代ペルシアにおいてはほとんどが再度筒袖の時代に移つていつたことも記憶すべきであろう。

Ⅱ) 日本女性が古墳時代から飛鳥・奈良朝時代にかけて身につけていた領巾・渾須比は、ペルシアにおいても、中国においてもその形を見る事ができるという事実に注意すべきである。日本における渾須比は、その優雅なドレープ性に目的を持つたものである。古事記・萬葉集には「渾須比トイウ服アリ八千矛命ノ詞ニ多タガナセイマギトカズアオシイマギトカ知賀遠母伊麻陀登加受豆渾須比遠母伊麻陀登加泥婆又宮贊姫命謁ニ和賀邪勢流意須比能須蘇爾云々トアリ此名ハ襲ノ義ニテ男女トモ表衣ノ上ニ被テ形ヲ覆ヒ隠ス服ナルガ仁徳天皇ノ朝女鳥王謁ニ波夜夫佐和氣能美渾須比賀泥トアレバ當時モ着用セシニヤ太神宮式ニ帛意須比ハ候長ニ丈五尺広ニ幅トアリ奈良ノ朝ニ至テハ神ノ祭ル時女ノ著ル服ノ如クナレリ」とある。巻き衣のもつ特性を生かそうとしたものである。ペルシア時代におけるテユニツクにドレープを着用し

た型の線カンディスの線の美しさを求めるものと同じ目的のもとに生まれたものと考える。領巾はペルシャ6世紀頃の作品「アナヒーター女神装飾把手つき水瓶」の女性をみると、身につけているのがわかる。これも巻衣のドレープの美しさを求めた型でワンピース型式にそれが変わった時、そのドレープの流れを求めるものとして領巾伏のものの現出があり、それが日本にそのまま入り、日本人の藝術性と一致し、その美しさを女性が好んだのである。しかしこれは平安時代に入り姿を消していくのである。國風文化の隆盛をきわめたものは前代のものはすべて中国文化であるとし、服飾様式は変つていくのである。渾須比にしても、領巾にしても一枚の布である。それを衣裳形式の衣服に合わせる目的のためとか、保温性の目的でもなく、ただ、身につけた場合の線の優雅さによる女らしさの表現があり、古墳時代より男女の別をはつきりつけていつた。

服飾の歴史的流れに関する限り、この二つの点から考察しても日本はペルシアの文化に大きな影響を与えられるのである。紋様そのものにおいても、唐草模様はもともとはペルシアのものである。故に、日本の当時の服飾は、中国を通じてアジア大陸の文化の影響を強く受けているのであるといつても過言ではないだろう。

以上、ペルシア、中国、日本服飾文化の関係を二点において考察したが、文化の発生の時代は異なるが、服飾型式のステップは西アジアとの交流は深くはあつたが、当時の人間が求めたものは同じではなかつたか、と問題を提議したい。

参考資料として中国・ペルシア・日本の美術品をあげておく。

#### 日本美術

「埴輪各種」、「玉虫厨子の施身聞偈図」(7世紀)、「天寿国曼荼羅」(7世紀)、「薬師寺の吉祥天」(8世紀)。

#### 中国美術

「青ガラスの高杯を捧げる少女」(唐)、「彩絵婦女俑」(漢)、「紅衣舞女」(唐)、「腰かける女」

## 日本古代服飾と西アジア古代服飾の関係についての考察

(唐), 「馬牽き胡人と馬」(唐)「陶範」(春秋未), 「鄧県彩画像碑」(六朝), 「永泰公主墓壁画」(唐), 「その他の墓壁画」(唐), 「同肪筆花仕女図」(唐), 「職貢図巻」(六朝)

**ペルシャ美術**

「男子立像」(紀元前3000), 「アナヒーター女神装飾銀製八曲長杯」(ササーン王朝), 「帝王狩獵図皿」(ササーン王朝), 「アナヒーター女神装飾把手つき水瓶」(6世紀)「ダウリス大王戦闘図浮彫」(前6世紀頃), 「貴人像」(紀元1世紀), 「シャーブル一世肖像彫刻」(紀元3世紀頃), 「ターグ・イ・ブスター大洞」(紀

元6世紀)「楽人装飾針」(紀元4世紀)がある。

**引用文献**

- (1) 歴世服飾考 明治図書 故実業書より
- (2) 日本服装史 日本女子大学 木檜 権夫
- (3) 古代服装身具 斎藤 忠
- (4) 世界美術全集(日本)平凡社
- (5) 西洋服飾発達史 光生館 丹野 郁
- (6) Historic Costume fo the Amateur Theatre By Harald Melvill
- (7) Costume By James Laver
- (8) 京大東洋史 創元社
- (9) 東洋史と西洋史とのあいだ 岩波書店 飯塚浩二